

編集後記

思えば、地球温暖化が叫ばれてもう久しくなったような気がする。ここ数年のことであるが、年々夏が長くなり、気温も今年は遂に日本新記録を更新した。おかげで秋が短くなり、いきなり寒くなるように感じる気候がこの二・三年続いている。このような酷暑・極寒に耐えて発掘調査をされている方々の努力により、古代史をはじめ、歴史的に新しい知見が少しずつ増えてきている。今回、この『木簡研究』第二九号に掲載された多くの木簡も、こういった多くの方々のおかげで努力とご苦労とに支えられて我々の目に触れているわけである。そのことを忘れては、将来の『木簡研究』も内容の薄いものになっていくことであろう。今回の『木簡研究』でも、全国各地から多くの木簡の情報が寄せられた。心から感謝したいと思う。今回も、中世から近世の木簡が多く寄せられ、この時代の木簡の重要性が徐々に浸透してきている様子が窺える。特に、ここ数年の『木簡研究』では実に多くのこれらの情報が寄せられてきているが、その中でも一つのパターンには収まらないようなさまざまな内容を含んでおり、今後の研究の進展でこれらの木簡の多くが活用されていくことを願ってやまない。これからは各地で見つかる多くの木簡を集積していくことが、『木簡研究』の責務の一つであると深く肝に銘じている。

『木簡研究』では、これらの発掘調査で得られた多くの木簡に関する情報以外に、研究集会での報告や論考などが載せられている。

今回は、二〇〇六年九月に九州国立博物館で開催された九州特別研究集会での報告などが掲載された。当日の熱い議論や、重要な報告を、改めて会員はじめ多くの方々の前に提示することができた。今回の報告を多くの方々に読んでいただき、改めて木簡に関する議論を巻き起こせたら、本号の役割を果たせるのではないかと思う。

また、今回は、コラムでも多くの文字資料に関する情報を記載した。漆紙文書については多賀城で見つかった第九六号漆紙文書の裏面に発見された新出文書が紹介されている。これらを通じて、改めて文字資料とは何であるか、発掘調査で出土した文字資料の扱い方というものを改めて問題提起できたらと思っている次第である。

いろいろと勝手なことを述べたが、『木簡研究』の編集にあたってご協力いただいた全国各地の発掘機関・調査の担当者の方々に改めて感謝申し上げる。また、編集作業の実務は、編集担当委員とともに、奈良文化財研究所の渡辺晃宏委員と、今年編集補助三年めになる京都大学大学院の桑田訓也君が絶妙のサポートで支えてくださった。私自身が業務の関係であまり編集に関われなかったことを改めてお詫び申し上げたい。また、今年も「わがままな」会誌の印刷をお願いすることになった真陽社に感謝申し上げます。

(土橋 誠)